「江南は瘴癘の地」そして故郷は

――隋の孫萬壽の詩を手がかりとして――

原田直枝
南山大學

魏晉南北朝期の文學を辿る際、南朝の文學の流れに寄り添って眺めることは多い。これは、長い中國文學の流れの上でとりわけ大きな影響を殘した時期の一つが南朝である事實に照らして、決して不自然なことや不當なことではない。しかし、この時期の最後、短命であり不完全でありながらも南北統一した空間を舞臺とした隋代の文學を見る場合には、久々に擴がりを得た人々の移動空間を意識し、そこに流れ込んだ、南朝的なるもの北朝的なるものに對して、どちらか一方に偏らない目配りをする必要があるだろう。そして、些か難しいことだが、兩者を分け隔て色分けするよりは、久々に統一された空間の中でどのように關わり合い、共存し合い、やがて折り合っていったのか、という關心を向けたなら、魏晉南北朝から唐代への文學の流れを把握するうえでも、また、その狹間で、特色がわかりにくい隋代文學そのものの性格を知るうえでも、有效なヒントが得られるだろう。こうした見通しのもと、筆者は前に『隋書』文學傳所收の南朝系の人々の作品を取り上げ、考察を試みたことがある。[1] 本論は、同じく『隋書』文學傳收錄の對象となっている北朝系の詩人孫萬壽を手がかりに、隋代の作品數篇を檢討しながら、隋代文學の樣相について新たなヒントを探り出すことをめざすものである。

一　孫萬壽の傳

『隋書』文學傳において孫萬壽は、同傳に名を列せられる十九人（附傳も含む）のうち、北朝系としては崔儦、杜正玄・正藏と合わせて四名、隋代南朝由來の詩人である劉臻、王頍、諸葛潁、王貞、虞綽、王冑、庾自直、潘徽八名と同程度に、その人生のおおまかな軌跡を辿れるだけの紙幅が充てられている。一般に、正史本傳に收錄される詩賦

や文は、その人物の事蹟と密接に關わるものであり、またその時代における當該人物の位置づけをも反映するものであるが、孫萬壽の場合は、一篇の長大な五言詩が收錄されている。まずは、孫萬壽の略歷を確かめることから取りかかることにしよう。

孫萬壽に關する記錄は、『隋書』の他に『北齊書』『北史』においても見ることができる。『隋書』では「文學傳」に萬壽單獨で取り上げられる形になっているが、『北齊書』『北史』ではそれぞれ「儒林傳」に父祖に列せられる形で收められている。三書のうち最も詳細なのが、『隋書』文學傳である。初めに、その出自と若年期。

孫萬壽、字は仙期、信都武強の人なり。祖の寶は、魏の散騎常侍。父の靈暉は、齊の國子博士。萬壽　年十四にして、阜城の熊安生に就きて五經を受け、略ぼ大義に通じ、兼ねて子史に博涉す。善く文を屬し、談笑に美し、博陵の李德林　見て之を奇とす。齊に在り、年十七にして、奉朝請たり。（孫萬壽、字仙期、信都武強人也。祖寶、魏散騎常侍。父靈暉、齊國子博士。萬壽年十四、就阜城熊安生受五經、略通大義、兼博涉子史。善屬文、美談笑、博陵李德林見而奇之。在齊、年十七、奉朝請。）

信都武強は河北省。生年・卒年とも正確にはわからないものの、本傳末に卒年が五十二歳と記載されているのをもとに、そこに至るまでの經歷を勘案すると凡その推定が成り立つようで、生年は五五六年～五六〇年頃、卒年は六〇八年～六一二年頃と見ることができる。[2] 北齊で十七歳の孫萬壽が就いたという「奉朝請」の職は、貴族の子弟が初めに就く官職として一般的なものの一つである。なお、『北齊書』『北史』には、北齊時代の官歷として、陽休之に召されて開府行參軍になったという記錄も見える。[3] 北齊が滅んだのが五七七年であるから、いずれ孫萬壽は、官途につくようになって間もなく、自らの屬す國が滅ぼされる事態に遭遇した。さらに、その北周も覆り、隋の時代がやってくる。

引き續き「文學傳」によって、隋に入った當初の經歷を見てみよう。

高祖　禪を受くるや、滕穆王 引きて文學と爲す。

衣冠の不整なるに坐して、江南に配防せらる。行軍總管宇文述召して軍書を典らしむ。萬壽は本と自ら書生にして、從容文雅たり。一旦從軍して、鬱鬱として志を得ず、五言詩を爲りて京邑の知友に贈りて曰く、……（略）。（高祖受禪、滕穆王引爲文學、坐衣冠不整、配防江南。行軍總管宇文述召典軍書。萬壽本自書生、從容文雅。一旦從軍、鬱鬱不得志、爲五言詩贈京邑知友曰、……（略））

隋になってからはまず、滕穆王楊瓚の文學となった。楊瓚は、隋高祖文帝の同母弟で、文帝が北周から政權を奪取した五八一年、滕王に立てられた（『隋書』卷四四本傳）。滕王の下で仕えるうち、やがて孫氏は「衣冠不整」すなわち官人としての正裝が亂れているという罪によって、陳攻略の最前線、江南防備の軍に送られ、宇文述の下で軍事擔當官として働くことになる。これが孫萬壽にとっては不本意な左遷で、長編五言詩「遠戍江南寄京邑親友詩」の制作につながってゆく。宇文述は「平陳の役」で活躍した軍人。[4] 孫氏が宇文述の下で働いたのも、隋による陳平定が成る五八九年までの一時期のことと考えられる。

この後の經歷についてはあらましのみの紹介とする。嫌々ながらの江南での軍役を退いて鄕里に戻った孫萬壽は、その後十年餘、再び出仕することがなかったが、仁壽初（六〇一年）になって、氣が進まぬままに煬帝の弟である豫章王楊暕の長史を拜し、暕が齊王に轉じると（六〇六年）それに從った。この王の許を辭して何年かの後に在官のまま五十二歲で亡くなった。[5] 官吏として格別な働きがあったという記載はなく、あまり氣に入ったポストにも惠まれなかった人であることが窺える。また、『隋書』文學傳所收の南朝由來の人々のように文帝や煬帝の側近く仕える、という場面も無かったようである。

さて、『北齊書』『北史』兩書で「儒林傳」に配されている通り、孫氏は代々學問の家で、萬壽も當然その家學を受け繼いで育った。經學が重んぜられたことで知られる北朝において、その風に適った士人として育ったものと推測されるが、一方また「有辭藻、尤甚詩詠」（『北齊書』）と、詩文に優れた才能を示していたことも言及されている。『北史』が、それより前に成立していた『隋書』においては

「文學」に配されている孫萬壽を、「儒林傳」で父祖の列につらねる扱いにしたのは、家系に沿った記述を優先したためであるようだ。因みに『北史』の「文苑傳」序は、孫萬壽をその父祖とともに「儒林傳」に配することについて次のように説明している。すなわち、「『隋書』では劉臻、崔儦、王頍、諸葛頴、王貞、孫萬壽、虞綽、王冑、庾自直、潘徽を序して文學傳としているが、そのうち崔儦、王頍、孫萬壽はそれぞれの家の傳に配されているので、それ以外の人々のみここ（「文苑傳」）に列する⑥」と。かたや、隋一代に的を絞り、隋代の諸相を述べるのを趣旨とする『隋書』が記述對象とすべきは、孫氏一門ではなく萬壽一人。父祖と切り離した一個人としての孫萬壽は、「文學」の列に加えるのが相應と判斷されるような要件を備えていた。次章で見る通り長大な五言詩「遠戍江南寄京邑親友詩」を、『隋書』が全文收錄しているのも、後世はいざ知らず、隋の當時において孫萬壽に寄せられた詩人としての評判を反映してのことに違いない。

とは言え、殘念ながら、この「遠戍江南寄京邑親友詩」以外の作品で、現在閲することのできる孫萬壽の作品は、類書等によって傳わる五言詩八篇程度である（次章參照）。傳に「十卷有って世に流通した⑦」と記される孫萬壽の集は、現存しない。そもそも、「文學傳」にその傳を載せる『隋書』の、「經籍志」の著錄からさえ漏れている。もっとも、こうした例は隋の人々の集においては珍しいことではなく、むしろ「經籍志」に著錄されるほうが珍しい。因みに『隋書』經籍志・集部別集類に著錄されている隋代の集は十八件だけである。

煬帝集十五卷　王祐集一卷　盧思道集三十卷
李元操集十卷　辛德源集三十卷　楊素集十卷
李德林集十卷　牛弘集十二卷　薛道衡集三十卷
何妥集十卷　柳晉集五卷　江總集三十卷　江總後集二卷　蕭愨集九卷　魏彥深集三卷　諸葛頴集十四卷　劉子政母祖氏集九卷　王冑集十卷

ここには、例えば、孫萬壽と同じく「文學傳」に配され、それぞれ個人の文集があったと記述される劉臻、王頍、庾自直の名も見當たらず、王冑、諸葛頴の名のみ見える。北

朝系では盧思道や薛道衡など、「文學傳」序が、文學史上に足跡を殘した人物として擧げながらも「それぞれ本傳があるから」という理由で「文學傳」の收錄對象としなかったような大官、政治的にも重要な役割を演じた人物がほとんどを占めている。[8]「經籍志」に著錄されることは、その人の詩文のみならず、總合的な影響力や功績を或る程度反映するものであることが再認識させられる。

こうして見てくると、四十年にも滿たない隋代を經て、唐初までのわずかな期間にその文集も佚してしまった孫萬壽という存在は、あまり重々しくはない。但し、歷史の波に埋もれてしまったこの詩人に關して『隋書』文學傳が傳えてくれた、長大な五言詩一篇、という情報。及び類書類によって傳えられた諸篇。たとえそれが、隋を過ぎると早々に人々から忘れ去られてしまうような一過性のものであったとしても、ともかく一時は人々の話題を集めたという記錄は動かない。そうした作品を讀み解き、作品を生み出した隋という時代の文學の一面を掘り起こし、文學史の一頁に加えることは決して無意味ではないだろう。

「江南は瘴癘の地」そして故郷は（原田）

章を改めて、具體的にその作品を檢討してみようと思う。

二　「遠戍江南寄京邑親友詩」

現存する孫萬壽の作品は五言詩に限られる。『隋書』所收の一篇の他に、各種類書に收錄されたものも合わせ、逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』に見えるのは計九篇。そのうち別人の作品である可能性のある、疑わしい一篇（左の一覽で＊印を附してある）[9]を除いて八篇。これはもちろん煬帝をはじめ、薛道衡、盧思道、虞世基など二桁の作品が存するのとは比べものにもならないが、隋代士人の詩の現存數としてはだいぶ多い部類に入る。逯欽立による收錄タイトルを次に揭げる。

「遠戍江南寄京邑親友詩」（『文苑英華』卷二四八寄贈）
「行經舊國詩」（『文苑英華』卷二八九行邁）
「東歸在路率爾成詠」（『初學記』卷二四／『文苑英華』卷二八九行邁）
＊「早發揚州還望鄉邑詩」（『文苑英華』卷二八九行邁）
「別贈詩」（『文苑英華』卷二八六留別）

「答楊世子詩」（『文苑英華』卷二四〇酬和）
「和張丞相奉詔於江都望京口詩」（『文苑英華』卷二八九行邁）
「和周記室遊舊京詩」（『文苑英華』卷二四〇酬和）
「庭前枯樹詩」（『文苑英華』卷三二六花木）

すべて『古詩紀』では「詩紀」卷一二五に收められる。さし當たって本章では、現存する孫萬壽の詩の中核と言えそうな「遠戍江南寄京邑親友詩」（以下、「遠戍江南……詩」と略す）について檢討することとしたい。⑩

前章に引いた本傳に見える通り、この詩の制作の動機は、微罪で江南へ飛ばされたうえに、軍務に携わることになった境遇への不滿、と見られる。祖父も父も「儒林傳」に名を刻まれる學問の家に生まれ、自らも文儒の道を歩く氣概を持って人生のスタートをきったであろう孫萬壽。それが軍人宇文述の江南防備の軍役に役せられるとは想定外、とばかり、わが身の上の不遇を歎き、不滿をかこって、京邑に在る「知友」に贈ったのがこの詩である、と『隋書』本傳には說かれている。「鬱鬱不得志」と言えば、「心鬱鬱之憂思兮」（「抽思」）、「慘鬱鬱而不通兮」（「哀郢」）など「鬱鬱」という形容がたびたび繰り返される『楚辭』九章がある。江南に流された屈原が「君を思い、國を念い、憂心極まり罔く」して作られたという「九章」、そして「九章」のモチーフを繼承した歷代の「不得意」文學の流れを直ちに想起させるものであり、『隋書』編者も當然それを意識してこの表現を用いたであろう。「遠戍江南……詩」成立の情況、またその基調を端的に說き明かすものと言える。

全部で八十四句から成るこの詩は、『先秦漢魏晉南北朝詩』所收の隋代五言詩の中では、楊素が薛道衡に贈った七百字の詩（「贈薛播州詩十四章」）に次ぐボリュームであり、一續きのものとしては突出した長さである。換韻によって七節に分かつことができる。⑪その節ごとに內容も移り變わってゆくので、一節ごとに追って見てみることにしたい。

賈誼長沙國　　賈誼　長沙の國
屈平湘水濱　　屈平　湘水の濱
江南瘴癘地　　江南は　瘴癘の地
從來多逐臣　　從來　逐臣多し

粤余非巧宦　粤　余　宦に巧みに非ず
少小拙謀身　少小より　身を謀るに拙し
欲飛無假翼　飛ばんと欲するも假翼無く
思鳴不値晨　鳴かんと思うも晨に値わず
如何載筆士　如何ぞ載筆の士
翻作負戈人　翻って負戈の人と作る

第一節は、江南の防備に配された自らの境遇を屈原、賈誼に擬して嘆く内容である。「本來は學問で世に出るはずの自分が、罪せられて左遷され軍務の日々を過ごす羽目になるとは」と現状を訝る調子が續く。志はあるのに、時世に遭わないことを嘆く詠懐の、典型的な展開と言ってよい。

一、二句目は、唐になって杜甫が江南に流謫の身となった李白に卽して作った詩「夢李白二首」其一に「江南瘴癘地、逐客無消息」と非常によく似た表現が見られることが指摘されている。[12] 隋初に、當の流謫人である孫萬壽が江南の地から京邑へ向けて寄せた言葉を、杜甫は却って京邑から江南の李白を思いやる、その距離感を表す詩語に轉用したわけで、その逆轉の妙の仕掛け元として孫氏のこの作は、もっと知られてもよさそうである。「瘴」の字の詩における用例であまり古いものは見られないが、「障」「鄣」に作るものは、鮑照「苦熱行」に「鄣氣晝熏體」があり、その李善注に引く「吳志」に「華覈表曰、蒼梧南海、歲有癘風鄣氣[13]」とある。

飄飄如木偶　飄飄として木偶の如く
棄置同芻狗　棄置せられて芻狗と同じ
失路乃西浮　路を失いて乃ち西に浮かび
非狂亦東走　狂に非ざるに亦た東に走る
晚歲出函關　晚歲　函關を出で
方春度京口　方春　京口に度る
石城臨獸據　石城　獸の據るに臨み
天津望牛斗　天津　牛斗を望む

第二節。第一節を受けて、少々觀念的な、ぼかした表現になっているが、「木偶」や「芻狗」は、孫氏自身の來し方を、不安定で輕々と時代に翻弄される存在として擬えたものと見える。三句目「西浮」は『楚辭』哀郢「過夏首而西浮」に、四句目「東走」は『韓非子』說林訓上「慧子曰、

狂者東走、逐者亦東走。其東走則同、其所以東走之爲則異」に、とともに由來を辿れる表現である。或いは北齊から北周、隋へ遷り、そして現在江南最前線へ配されたこと自體を言っているのかも知れない。五、六句目の「晩歲……」「方春……」は江南へ追われたことを述べたもの。七句目「獸據」の「據」は「踞」。「獸」は『文苑英華』『古詩紀』では「虎」に作る。「石城」すなわち石頭城を指して「石頭虎踞」という言い方もあり、本來は「虎」であったと思われる。『隋書』で「獸」に作るのは、唐人が高祖の祖父李虎を諱んで「獸」に改めたという說がある。(14)

なお、揚子江を挾んで江都の對岸に位置する京口（江蘇省鎭江市付近）に關して、孫萬壽の作品にはもう一つ「和張丞相奉詔於江都望京口詩」（以下、「和張丞相……詩」）がある。むろん、詩題の中にその地名が見えるというだけの符合で、和した相手の「張丞相」が誰を指すものかも未詳、前後の事情も不明ではあるが、ひょっとすると同じ江南時代のものであるかも知れない。この「遠戍江南……詩」の表現と類似した部分も少なくないので、この後の該當する箇所で隨時參考にしたい。

牛斗盛妖氛　牛斗　妖氛盛んに
梟獍已成羣　梟獍　已に羣を成す
郗超初入幕　郗超初めて入幕し
王粲始從軍　王粲始めて從軍す
裹糧楚山際　糧を裹む　楚山の際
被甲吳江濆　甲を被る　吳江の濆（ほとり）
吳江一浩蕩　吳江　一（はなは）だ浩蕩たり
楚山何糾紛　楚山　何ぞ糾紛たる
驚波上濺日　驚波　上りて日に濺ぎ
喬木下臨雲　喬木　下りて雲に臨む
繫越恒資辯　繫越　恒（つね）に辯に資し
喻蜀幾飛文　喻蜀　幾（たび）たび文を飛ばす
魯連唯救患　魯連　唯だ患を救うのみ
吾彥不爭勳　吾彥　勳を爭わず

第三節は、冒頭で前節末の語「牛斗」を繰り返す歌い方で始まる。こうした尻取りのような技法は歌謠でよく見かけるうたい方であるが、本節には同語の反復が多い。「牛斗」

を繰り返した一句目に續き、五、八句目で「吳江」、六、七句目で「楚山」がそれぞれ繰り返されて、江南の地勢の描寫に當てられている。それは同時に、作者の現在の居場所設定ともなっている。なお、「波」と「喬木」を對にした表現は、「和張丞相……詩」にも見える。

回首觀濤處　首を回らす　觀濤の處
極望滄海湄　望を極む　滄海の湄
流波去無限　流波　去りて限り無し
喬木不勝悲　喬木　悲しみに勝えず

この節では、この江南の空間に絡めて、軍陣に關わって文才を發揮した、多くの古人をめぐる聯想が繰り廣げられる。三句目、郗超は東晉の郗鑒の孫、郗愔の子で書に優れ、『書品』中之下に排される。桓溫に辟されて征西大將軍掾となり（「桓溫辟爲征西大將軍掾」）、その幕に參與したことが『晉書』卷六七に記される。四句目、魏の王粲の「從軍詩」五首（『文選』卷二七）は、建安二十（二一五）年に曹操の張魯征伐を讃えたものとされる。十四句目の吾彥は、『晉書』卷五七に「吳郡吳人也。出自寒微、有文武才幹」と記される。十一、十二句目も故事を踏まえたもので、「繫越」は漢の終軍が、南越王を入朝させるに當たって、漢帝から授かった長纓で必ずや南越王を繫いで參じましょう、と豪語し、その通りになった、という故事（『漢書』終軍傳）。「喩蜀」「飛文」と言えば、司馬相如の「喩巴蜀檄」が直ちに思い浮かぶ。魯連は魯仲連。歷史上の人物とその故事を引いて己れの懷いを託すスタイルの詩と言えば、左思「詠史詩」からの流れが、まず思いあわされるが、この節も確かに、江南の軍務につけられて氣に染まぬ從軍の日々を過ごす自らを、慰めるかのような調子が認められる。

羈遊歲月久　羈遊　歲月久しく
歸思常搔首　歸思　常に首を搔く
非關不樹萱　關に非ずんば萱を樹えず
豈爲無杯酒　豈に杯酒無きを爲さんや
數載辭鄉縣　數載　鄉縣を辭し
三秋別親友　三秋　親友と別る
壯志後風雲　壯志　風雲に後れ
衰鬢先蒲柳　衰鬢　蒲柳に先んず

「江南は瘴癘の地」そして故郷は（原田）

第四節は、冒頭の「羈遊」「歸思」という語が鍵となって、故郷を離れてから徒らに年を重ねること、その憂い、故郷へ寄せる思いをうたい、嘆いている。三句目「樹萱」は、鮑照の「貧賤苦愁行」に「空庭慙樹萱、藥餌愧過客」の例があり、もとを辿れば、忘憂の草である萱を植えるのは母親の居室に當たる北堂の庭（『詩經』衞風・伯兮「焉得諼草、言樹之背」の傳に「背、北堂也」）、とされるのを踏まえる表現である。七、八句目は、若い頃の志も果たせぬまま、しのびよる老いを憂う常套的表現と言ってよいだろう。

先回りして言ってしまうと、この「遠戍江南……詩」は、だいぶ典故が多い。そして、引かれる故事は、概ね晉以前のものであるのも、特長の一つである。

心緒亂如絲　心緒　亂るること絲の如く
空懷疇昔時　空しく懷う　疇昔の時
昔時遊帝里　昔時　帝里に遊び
弱歲逢知己　弱歲　知己に逢う
旅食南館中　旅食す　南館の中
飛蓋西園裏　飛蓋す　西園の裏
河間本好書　河間　本とより書を好み
東平唯愛士　東平　唯だ士を愛す
英辯接天人　英辯　天人に接し
清言洞名理　清言　名理を洞（つらぬ）く
鳳池時寓直　鳳池　時に寓直し
麟閣常遊止　麟閣　常に遊止す

第五節は、不本意な現實から目を轉じて、過去を回想するモチーフが見える。五句目「旅食南館」は魏文帝「與朝歌令吳質書」に「馳騁北場、旅食南館」（『文選』卷四二）とあるのを踏まえるか。それと對を成す次句の「西園」も、曹操が鄴縣（河北省）に營んだと傳えられる園林の名で、曹植「公讌詩」には「清夜遊西園、飛蓋相追隨」（『文選』卷二〇）とある。ともに魏の曹操父子に關係する詩句である。「河間」は、漢の諸王の中でも好學で知られる河間憲王劉德（『漢書』卷五三）、「東平」は、これも漢の東平王劉宇（『漢書』卷八〇）を指す。一連の句を踏まえて、すべて孫萬壽が長安で滕穆王に仕えた頃を擬えると見る說がある。[15] しかし、いずれも今の山東省、河北省すなわち北齊の

領域に因む地名であることを考えれば、北齊時代を詠じている可能性がある。なお、「西園」の語は、やはり前掲「和張丞相……詩」に見える。

吾生乃民季　　吾が生は乃ち民季
疇日佐藩維　　疇日　藩維を佐く
尚想西園夕　　尚お想う西園の夕
猶懐北固時　　猶お懐う北固の時

本節三句目「昔時……」以下の四句とよく似た調子であるのは、興味深い。

勝地盛賓僚　　勝地　賓僚盛んに
麗景相携招　　麗景　相い携招す
船汎昆明水　　船は昆明の水に汎かび
騎指渭津橋　　騎は渭津の橋を指す
祓除臨灞岸　　祓除　灞岸に臨み
供帳出東郊　　供帳　東郊に出づ
宜城醞始熟　　宜城　醞　始めて熟し
陽翟曲新調　　陽翟　曲　新たに調(ととの)う
繞樹烏啼夜　　樹を繞り　烏　夜に啼き
雒麥雉飛朝　　麥に雒(な)き　雉　朝に飛ぶ
細塵梁下落　　細塵　梁下に落ち
長袖掌中嬌　　長袖　掌中に嬌たり
歡娛三樂至　　歡娛　三樂至り
懐抱百憂銷　　懐抱　百憂銷ゆ
夢想猶如昨　　夢想すれば猶お昨の如く
尋思久寂寥　　尋思すれば久しく寂寥
一朝牽世網　　一朝　世網に牽かれ
萬里逐波潮　　萬里　波潮を逐う
廻輪常自轉　　廻輪のごとく常に自ら轉(めぐ)り
懸旆不堪搖　　懸旆のごとく搖るるに堪えず

第六節。懐舊の情をこめ、舊時都で見聞した繁華のさまを回想する風の一章である。「勝地」は景色の優れた土地。「三樂」は、『孟子』盡心上に見える君子の三つの樂しみを指すとすれば、父母が健在で兄弟に事故が無いこと、行いに恥ずべきところが無いこと、天下の英才を教育すること。『列子』天瑞に説かれる人生の三つの樂しみを指すとすれば、人に生まれること、男であること、長壽であるこ

と。ここでは、いろいろな樂しみ、というくらいの意かも知れない。末句の「懸旆不堪搖」は、楚の威王が秦と境界を接する自國の不安を喩えて「心搖搖として懸旌の如し」（『戰國策』楚策一）と言った故事にもとづく。最後の四句は、第二節前半の四句とほぼ同じく、時代の大きな變動に卷き込まれて不安定な自らを詠ったもので、語りの舞臺を、往時の回想から再び現實へと戻す一種の轉換裝置の働きをしている。

問題は、この節でうたわれる繁華な都の情景が、どの王朝の都を想定したものかであるが、「夢想猶如昨、尋思久寂寥」とあるのを見ても、北周に併呑される直前の北齊での若い日々にイメージを重ねているのではないか。そうであると、續く「一朝牽世網、萬里逐波潮」の二句によって示される場面の暗轉は、より劇的なものとして效いてくる。

登高視衿帶　鄉關白雲外	高きに登りて衿帶を視（み）れば　鄉關は白雲の外
廻首望孤城　愁人益不平	首を廻らして孤城を望めば　愁人益（ますます）平らかならず
華亭宵鶴淚　幽谷早鶯鳴	華亭　宵に鶴淚し　幽谷　早に鶯鳴く
斷絕心難續　惝恍魂屢驚	斷絕して心續き難く　惝恍として魂屢（しばしば）驚く
羣紀通家好　鄒魯故鄉情	羣紀　通家の好　鄒魯　故鄉の情
若値南飛雁　時能訪死生	若し南飛の雁に値わば　時に能く死生を訪ねよ

第七節。所謂「登高遠望」の常套を踏み、故鄉を遠く離れた羇旅者の詠懷にまつわる詩賦の典型的な形をとっている。二句目の末字「外」は、以下の偶數句末の韻と明らかに異なる。別の字であったのかも知れない。七句目「斷絕心難續」は、成公綏「嘯賦」に嘯の音の消え入りそうで消えないさまを表現して「離るるが若く合するが若く、將に絕えんとして復た續く（若離若合、將絕復續）」（『文選』卷十八）とあるのを思い起こさせる。次句「惝恍」は聽覺がぼんやりとして定かでないさまを言う。『楚辭』遠遊に「聽惝恍而無聞」。面白いのは、侯景の亂以降、北地へ入った南朝

人が「南飛の雁」を見たら羨み、また江南故地へのわが思いを託すものとしたのに對して、今江南を流謫の地と見る孫氏は、北なる都にいる友に向かって「自分を思い出してくれ」と呼びかけているところではないか。

江南の最前線へ送られ、軍幕の下で勤める我が身を、屈原や賈誼の流謫に擬え、形象化された江南の光景を詠じ、左遷以前の自分を都での榮えある身の上として回想し、再び流謫の羈旅感を綴って結ぶ、という流れ。志を得ず、世の中で自己本來の在り方が叶わない憤懣を託す詠懷の要素をふんだんに盛り込んだ作品である。

さて、『隋書』本傳によれば、この長い詩が隋の都に在る「知友」の許へ届けられ、人の知るところとなるや、評判をとり、壁に書して唱えられることさえあった（「此詩至京、盛爲當時之所吟誦、天下好事者多書壁而玩之」）という。「天下好事者」というが、どういう人々によって迎えられたのだろうか。少なくとも、風光明媚な江南を、昔も今も變わらぬ「流謫の地」として嘆く孫萬壽の聲に、南方から北へ移されるなどの艱難を體驗した人たちが直ちに共感できたとは想像しにくい。逆に、北朝在來の人々にとっては、現實に「江南への流謫」を體驗することは久しく有り得ないことだっただけに、孫萬壽個人への同情などよりは、むしろ題材の目新しさという點で、關心を呼ぶものとして受けとめられた可能性はある。官途に惠まれず、そればかりか譴責されて不本意な處分に遭い、自分の志と現實とのズレを悔しがる自らの胸中を、遠く都にいる知友に訴える、という枠組み。隋の盧思道「聽蟬鳴篇」が失意を詠うところなどは、これとそっくりだが、「聽蟬鳴篇」には「富貴功名本多豫、繁華輕薄盡無憂」「歸去來、青山下」など、人生觀、隱居願望までが籠められていて、一種の自己解決が着いているのとは微妙に異なり、孫萬壽のこの作品は、左遷という「今この時點での不得意」を歎くことに集中している。

梁末の侯景の亂以降、混亂の續いた世の中で、王朝の興亡、生別離苦に際會した人々の嘆きを歌う詩賦が次々と生まれた。また、そういった苛烈な現實から目を逸らすように、閉じられた宮廷の世界で唯美的な詩賦も、作られ續け

た。當然、隋代にもそうした風は引き繼がれていた。そんな中で、自ら求めざる土地に身を置く羈旅感を帶びつつ、徹底して自らの「志を得ざる」官途について述べ、不遇感を傳えることに重點が置かれた作品が、一時にせよ世間の評判をさらった、という一事は、目に留めておいてよいだろう。

ところで、以上確かめてきた特長に加えて、「遠戍江南……詩」はもう一つ、贈られた詩への應酬、といった外的な要求に應じて作られたものでなく、動機は何であれ、作者自身が懷いを訴える欲求に卽して作られたもの、個人的な詠懷、という要素を備えている。そして、「遠戍江南……詩」以外の孫萬壽の詩の中には、やはり個人的な感興に卽して作られたものとして扱うべき作品が、さらに二篇ある。

章を改めて、その詳細について檢討してみたい。

三　羈旅の情と、故鄕歸還の情

「行經舊國詩」と「東歸在路率爾成詠」。ともに『文苑英華』では卷二八九「行邁」に收錄されるこの二つの詩は、行旅をモチーフとしている。まずは「率爾成詠」という表題に卽興性が強調されている「東歸在路率爾成詠」のほうから見てみよう。題中の「東歸」は、『初學記』に從ったもので、これに據ると、隋の都から鄕里信都武強へ向かう旅の場での作、ということになる。本傳に「後歸鄕里、十餘年不得調」と記されるのと、關係するのだろうか。但し、『文苑英華』では「歸」を「都」に作り、するとこの詩は、東都洛陽に居て故鄕を思う作品ということになる。「歸」か「都」かで、居場所は異なるが、羈旅の點では共通する。

學官兩無成　學官　兩(ふたつ)ながら成る無し
歸心自不平　歸心　自ら平らかならず
故鄕尙千里　故鄕　尙お千里
山秋猿夜鳴　山　秋にして　猿　夜に鳴く
人愁慘雲色　人愁　雲色を慘(いた)み

客意慣風聲　客意（かくい）　風聲に慣る
羈恨雖多緒　羈恨　緒多しと雖も
俱是一傷情　俱（すべ）て是れ一に情を傷る

一見して、殊更に説明を要するほどの典故も無く、平明な言葉で綴られており、題に「率爾として」と説かれるのも肯かれるような一篇である。詩を受け取る特定の相手があると、そのために要するであろう修辞上の配慮が、この詩にはあまり働いていないように見える。しかし、わずか八句のうちに、「帰心」「故郷……千里」「夜猿」「雲」「客意」「羈恨」と、羈旅の悲哀に關わる語が次々とちりばめられ、それが「ひたすら心が傷む」という結句に收斂されていく構成は、緊密である。ここで孫萬壽の流離の痛みを増していると思しき要因は、第一句「學問も宮仕えもどちらもうまくいかない」という、社會の中で士人として成功しない自分についての苦い自意識である。自己の失意に羈旅の思いを絡ませて述べられる行旅の詩賦は目新しいものではないが、このように飾りが少なく、そのぶん率直な詠懷、という印象をもたらす例は、隋以前には珍しいのではなかろうか。

「行經舊國詩」は、故郷に立ち寄る機會が訪れて、その時の感興を述べたものであることが明らかな詩である。見てみよう。

蕭條金闕遠　蕭條として金闕遠く
悵望羈心愁　悵望すれば羈心愁う
舊邸成三逕　舊邸　三逕を成し
故園餘一丘　故園　一丘を餘（のこ）す
庭引田家客　庭に田家の客を引（まね）き
池泛野人舟　池に野人の舟を泛ぶ
日斜山氣冷　日斜めにして山氣冷やかに
風近樹聲秋　風近くして樹聲秋なり
弱年陪宴喜　弱年　宴喜に陪（したが）い
方茲更獻酧　方（まさ）に茲に　更（こもごも）獻酧す
脩竹慚詞賦　脩竹　詞賦に慚じ
叢桂且淹留　叢桂　且く淹留す
自忝無員職　自ら忝（かたじけな）くす　無員の職
空貽不調羞　空しく貽（のこ）す　不調の羞（はじ）

武騎非吾好　　武騎は吾が好みに非ず
還思江漢遊　　還た江漢の遊を思う

孫萬壽の「舊國」とは、もとの北齊の領域、さらに絞れば信都武強の邊りを指すものだろう。なお、詩題に「行經」と言うのは「立ち寄った」の意味であろうし、長期間故郷に退き籠った時期とは別の機會を指すのかも知れない。二句目の「悵望」は、例えば謝朓「郡内登望詩」に「悵望心已極、惝恍魂屢遷」（『文選』巻三〇）とあるように「悲しんで遠くを眺める」動作を言う。「羈心」は、旅心という意ととれる。都にいると故郷のことが頻りに思われるが、故郷へ立ち寄ったら立ち寄ったで、今度は都と故郷を隔てる距離が痛感される、というわけである。「舊邸」や「故園」は姿を變え、かつての「庭」や「池」には農民、舟子が入りこんでいる。季節は秋とて、早い日暮れとともに冷え込み、ざわざわと樹木の吹かれる音。前半は、寂寥の風景である。九句目以下は、「遠戍江南……詩」第五・六節と似て、有爲の若者だった過去を哀惜し、志に相違して官途のおぼつかない現狀を愧じる述懐が中心となっている。十句目「方茲更獻酧」の「酧」は「酬」の意。陶淵明「游斜川詩」に「提壺接賓侶、引滿更獻酬」の例が重ね合わされ、盛んに酒を酌み交わす場面に結びつく。『文苑英華』では「更」を「幾」に作り、「幾」であれば、たびたびという意に讀める。十三句目「無員」は、『漢書』百官表に「大夫掌議論、有大中大夫、中大夫、諫大夫、皆無員。多至十人」と見える。十五句目「武騎非吾好」武勇で身を立てるのは我が本意ではない、と言うのは、「遠戍……詩」で述べられた、軍務に對する不平と重なる。

さて、「東歸在路……詩」にしろ「行經舊國詩」にしろ、「歸心（羈心）」遠くから故郷を思う情、または久々に歸還し眼前にした故郷への哀惜の情を述べるのに、故事をほとんど交えないものであることが、目を引く。これを特長と言ってよいのかどうか。幸い、孫萬壽には「和周記室遊舊京詩」という、「舊京」に因む應酬の詩一篇がある。贈られた詩に和する、という外的な必要に迫られ、詩の世界を共有すべき「誰か」を意識した場合はどうなるのか、參照してみよう。なお「周記室」は未詳である。[16]

大夫愍周廟　大夫　周廟を愍み
王子泣殷墟　王子　殷墟に泣く
自然心斷絶　自然　心斷絶す
何關繫慘舒　何ぞ慘舒に關繫せん
僕本漳濱士　僕は本と漳濱の士
舊國亦淪胥　舊國　亦た淪胥す
紫陌風塵起　紫陌に風塵起こり
青壇冠蓋疎　青壇は冠蓋疎なり
臺留子建賦　臺は留む　子建の賦
宮落仲將書　宮に落つ　仲將の書
譙周自題柱　譙周　自ら柱に題し
商容誰表閭　商容　誰か閭を表さん
聞君懷古曲　聞く　君が懷古の曲
同病亦漣如　同病も亦た漣如たり
方知周處歎　方に知る　周處の歎
前後信非虛　前後　信に虛に非ざるを

冒頭二句は、所謂「黍離之嘆」「麥秀歌」の故事を踏まえた、滅亡した王朝を弔う[17]常套句。孫萬壽から見て弔うべき滅亡した王朝、六句目に云う「舊國」に當たるのは、北周に滅ぼされた北齊に相違なく、表題に見える「舊京」も、北齊の都鄴を指すであろう。五句目「漳濱」は、直接には河北を流れる漳水の濱、孫萬壽の出身地を指すものと思われるが、遡って三國魏の劉楨「贈五官中郎將四首」二の「余嬰沈痼疾、竄身清漳濱」（『文選』巻二三）を想起させる。九句目「子建」は曹植、「仲將」は韋誕。韋誕は、三國魏の文人で、能書であったことが傳えられる。『魏志』巻二一に「光祿大夫京兆韋誕」と記され、その裴注に引く『文章敘錄』によれば魏明帝の太和中に武都太守となり、能書を以て侍中に留補せられ、魏氏の寶器の銘題は皆な誕の書であった、と言う。仕えた明帝は、洛陽の宮室修築を好んで行い、園遊を繰り廣げたため、太子舍人の張茂が上書して諫めたことで知られる。[18]「周處歎」「前後……非虛」は、三國吳の滅亡後に晉に入った周處の故事を踏まえる。魏の出身である王渾が酒席に座した吳人に向かって「諸君は亡國の餘、感無きを得る乎」と問うたのに對して、周處は「漢末分崩し、三方に鼎立す。魏　前に滅び、吳　後

に亡ぶ。亡國の感は、豈に惟だ一人のみならんや」と切り返して、王渾をひどく恥じ入らせた、という（『晉書』巻五八）。「前後」國家興亡の勢い、どちらが先でどちらが後になるか、などわずかな違い。先に亡ぶも後に亡ぶも、ともに國を失うことに違いは無い。北齊が倒れるのに際會し、やがて北齊を倒した北周が隋にとって代わられるのを見た人ならではの感慨であるが、それはそれとして、以上、故事を踏まえた表現の多さは、歴然としている。また、前に見てきた數篇に繰り返し詠み込まれていた、孫萬壽自身の不遇感は、すっかり影を潜めてしまっている。

四　故郷への一時歸還——元行恭・江總の場合

ここで、孫萬壽の周邊に目を轉じてみよう。やはり北齊から北周、隋というコースを辿った元行恭に「過故宅詩」という作品がある。「故宅」であるから、孫氏の「舊國」よりいっそう焦點が絞られてはいるが、新たな王朝に併呑された故郷に立ち寄り、その際の感興に材をとっている點で、前章に擧げた孫萬壽の諸作品と似ている。

作者の元行恭（生卒年未詳）の經歴については、『北齊書』巻三八（『北史』巻五五）の父祖の傳に附される形で傳えられる。それによると、元氏は、北魏帝室の元氏につながる家筋に當たり、洛陽（河南省）の出。父の元文遙は、北齊で開府儀同三司、中書監を贈られた。その子である行恭については「姿貌美しく、父の風有り、俊才を兼ぬ。中書舍人に位し、詔を文林館に待つ（美姿貌、有父風、兼俊才、位中書舍人、待詔文林館）」と記される。文林館勤めを任ぜられたのは、將來を嘱望される存在だったということでもあり、北齊が亡ぶと、陽休之らとともに北周へ移される一人となった。[19] 現存する作品は、孫萬壽よりさらに少なく、「過故宅詩」「秋日遊昆明池詩」の二篇だけであるが、史書には、若い頃、素行にだいぶ傲慢なところがあったのを、心配した父の元文遙が、盧思道と交際させることにした、[20] というエピソードも傳えられ、江總、薛道衡と同題の詩「秋日遊昆明池詩」を殘す（後述）など、當時においては無視し難い存在の一人であった可能性が高い。なお、『北齊書』文苑傳に「高行恭」と錄されるのは「元」氏のこと

と見られる。[21]

「過故宅詩」を見てみよう。

頽城百戰後　荒邑四鄰通
將軍戟已折　歩兵途轉窮
吹臺有山鳥　歌庭聒野蟲
草深斜徑沒　水盡曲池空
林中滿明月　是處來春風
唯餘一廢井　尚夾兩株桐

頽城　百戰の後
荒邑　四鄰に通ず
將軍　戟　已に折れ
歩兵　途（みち）　轉た窮す
吹臺に山鳥有り
歌庭に野蟲　聒（かまびす）し
草深くして斜徑沒し
水盡きて曲池空し
林中に明月滿ち
是處（ここ）に春風來る
唯だ餘す　一廢井
尚お兩株の桐を夾む

冒頭の二句は、久しく引き離されている間に荒廢の色を濃くした故郷を、捉えたもの。三句目の「戟」字は『文苑英華』では「樹」に作る。「將軍」に「戟」の例では、格別な故事を手繰り寄せることはできない。「將軍」「樹」であれば、後漢の武將馮異が、軍旅の途上で諸將の論功を行う際にいつも樹の下に立って「大樹將軍」と呼ばれた故事があり、用例も豐富である。中でも、元氏に先立つ庾信「麟趾殿校書和劉儀同」に「月落將軍樹、風驚御史烏」の例があり、この元氏の詩と合わせて、後の杜甫「過宋之問莊斷章」の「更識將軍樹、悲風日暮多」の淵源として指摘する說もあるのは興味深い（吳曾『能改齋漫錄』巻六）。四句目が、明らかに阮籍を指すものであるだけに、それと對を成す故事を踏まえるのが自然と思われる。五句目「吹臺」は、春秋時代、師曠が樂を奏したという臺の跡に、漢代になって梁孝王が增築して樂を吹奏した（『水經注』渠水注）ことで知られる古跡で、今の河南省開封市附近と推定される。阮籍「詠懷詩」其六十に「駕言發魏都、南向望吹臺」とある。「歌庭」は、「吹臺」に對應するものと思われるが、未詳である。七句目以下は、「池」と「水」、「林」と「月」、「風」「井」「桐」など、景物を通じての「故宅」の描寫である。十一、十二句目の「廢井」「兩株桐」は、故郷、故宅を象徵する景物である井と桐樹を用いた表現。魏明帝

「猛虎行」の「雙桐生空井、枝葉自相加」などが思い合わされよう。もとの我が家に見出した荒廢の光景を一つ一つ取りあげる敍景的な句の後にこの二句に出會うことによって、一連の荒廢をもたらした時間の堆積、語り手が故郷を離れていた間に過ぎ去った時間の長さが、この詩の背後に見えてくる。

ところで、古跡をめぐりつつ、傳聞する世の故事を想起し、往時を回顧する詩賦のモチーフは漢代の行旅詩をはじめ、六朝を通じて見かけるが、「舊宅」や「舊京」など、作者自身が過去に暮らした空間に再び舞い戻ってその感慨を述べる、という例は、六朝末の段階になるまであまり見られないのではないか。因みに、この「過故宅詩」を收める『初學記』卷二四「居處部・宅第」には、江總「歲暮還宅詩」、同「南還尋草市宅詩」、唐太宗「過舊宅詩」などが並んでいるが、隋以前のものは見かけない。一方、同じく「過故宅詩」を收める『文苑英華』（卷三〇七「悲悼七・第宅」）になると、蕭子範「入元襄王第」、王筠「和蕭子範入元襄王第」、何遜「行經范僕射舊宅」、劉孝威「過康王第宅」など隋以前の作品が追加されているが、いずれも自分以外の人物所緣の邸宅を訪れての感慨を述べるものであって、微妙に傾向を異にする。新しい政權によって一旦は滅ぼされた故國、故郷から引き離され、もう二度と戻ることはできないかと諦めかかっていたその場所に、緣あって立ち戻った際の感慨。そうした主題を持つ詩が、隋詩の中に複數見出されることは、記憶にとどめてよいのではなかろうか。

しかもそうした作品は、隋に入った北齊士人に限るわけではない。陳から隋へ入った江總「南還尋草市宅詩」も、江南の舊宅に立ち戻っての懷いを詠じた詩である。

紅顏辭鞏洛　紅顏　鞏洛を辭し
白首入轘轅　白首　轘轅に入る
乘春行故里　春に乘じて故里に行き
徐步采芳蓀　徐ろに步きて芳蓀を采る
逕毀悲求仲　逕毀（こぼ）たれて求仲を悲しみ
林殘憶巨源　林殘（そこな）われて巨源を憶う
見桐猶識井　桐を見て猶お井を識り

看柳尙知門　柳を看て尙お門を知る
花落空難遍　花落ちて　空（くう）　遍（へん）たり難し
鶯啼靜易喧　鶯啼きて　靜（せい）　喧（けん）たり易し
無人訪語默　人の訪れて語默すること無く
何處敍寒溫　何れの處にか寒溫を敍せん
百年獨如此　百年　獨り此くの如し
傷心豈復論　傷心　豈に復た論ぜん

「轘轅」は、河南省偃師縣の東南に位置する險しい山。漢代に關が置かれた。一、二句目は、文字通りには河南省の洛陽一帶を表しているが、ここでは南朝時代の居所を指すものと解すべきだろう。江總は、『陳書』本傳に「濟陽考城（河南省）の人」と記されるが、むろん南朝では今の安徽省に僑置されていた。「紅顏」と「白首」の對比により、若くして離れた故郷に、年老いて歸ることを述べ、五句目からの四句では眼前の邸宅の荒廢のさまを綴る。五、六句目は、「逕毀」「林殘」損なわれた景物をそのままに寫し、七、八句目は、失われた「井」「門」を、それぞれ「桐」「柳」という生き殘った景物に寄せて蘇らせている。續く九、十句目は、地面に散り敷く花、靜寂を破って聞こえる鶯の聲とを捉えている。それぞれ視覺と聽覺を通じて、荒廢の色濃い空間が完全な空漠には至らず、完全な靜寂にも至らないさまを捉えたこの二句は、孫氏や元氏の故郷にまつわる作品には窺われない、より複雜で深刻な歸還の懷いを傳える裝置として後半四句に結びついてゆく。花が落ち、鳥が鳴く現象を、故宅の「空」「靜」を阻むものとして捉えた江總は、挨拶を交わす知己とてなく、「百年」の孤獨を己れの中に感じているのである。

夙にこの詩を取り上げて江總論を示された安藤信廣氏は、同じ論考の中で、元行恭のもう一つの現存作「秋日遊昆明池詩」が、江總や薛道衡の同題の詩と場面を共有するものであり、南北の出身の違いを超えた「羈旅」という共通性を持つものであるということを說いておられる。[22] 元氏に「過故宅詩」があり、江總に「南還……詩」があって、どちらも不本意にも引き離されていた故郷、故宅への一時的な歸還を詠じる內容であることもまた、單なる偶然ではなく、南北分裂の時代から統一帝國へ向かって動き始めた隋

という時代環境に應じた文學の展開を示すものと言えるかも知れない。

結　び

――隋の帝國は短命であった。文學においても十分に特色をあらわすには至らなかった。とはいえ、この短い時期の詩人が、唐詩の抒情性のさきがけとなる作品をのこしていることは、やはり注意すべきだろう。

（小川環樹『唐詩概說』）

六朝から隋へ、隋から唐へ。間をつなぐ隋代において劇的な變化を見出すのは、確かに容易ではない。しかしながら、孫萬壽並びに元行恭の詩には、北齊の先輩たちの詩とも、北周の頃の詩人の詩とも、異なる世界が覗いている。「遠戍江南……詩」の江南流謫のモチーフは、讀む者に些か誇張を帶びた印象をも與えるが、實際に南方に左遷された北方出身の詩人がうたうことによって、リアリティーのある抒情性を獲得している。一方、「東歸在路……詩」「行經舊國詩」「過故宅詩」「南還尋草市宅詩」は、歷史上の故地に佇んで古今に思いを騁せる詠懷とは一味違う、作者にとって言わば原點である故鄕、故宅への回歸に因んだ懷いを詠じたものである。北周から隋にかけて、例えば庾信のように故鄕から引き剝がされた詩人が羈旅の情を託した作品が、大きな展開を見せたことは知られる通りである。隋に入って、人々の生活の舞臺が統一される、という空間的な變化が起きた。地理的な境界が取り拂われたことは、詩文にどう結びついたろうか。孫萬壽、元行恭、江總の作品から窺うなら、もう再び見られない故鄕を腦裏に描くだけだった一つ前の世代と異なり、夢にまで見た故鄕に戻ることが可能になったものの、そこに見出したのは時間の經過のもたらす荒廢だった。こうした、詩人にとっての幸運と不運が無い混ぜになったような作品群は、珍しく隋という時代の特質をよく反映している。

孫萬壽も元行恭も、ほとんど顧みられることの無かった人物である。けれども、彼らの作品において、前代文學の單なる模倣や追隨という域を少し超えた、特色ある詠懷が認められることは、今後顧みられてよいのではなかろうか。

註

① 拙論「『隋書』文學傳の人びと――隋代の南朝由來の文人たちをめぐって――」（二〇〇四年、『中國文學報』第六十八册）。

② 曹道衡・沈玉成『中古文學史料叢考』（二〇〇三年、中華書局）「孫萬壽卒年」を參照。

③ 「齊末、陽休之辟爲開府行參軍」。

④ 『隋書』卷六一「宇文述傳」に「開皇初、拜右衛大將軍。平陳之役、復以行軍總管率衆三萬、自六合而濟」とある。

⑤ 本傳の省略部分は次の通り。「後歸鄉里、十餘年不得調。仁壽初、徵拜豫章王長史、非其好也。王轉封于齊、卽爲齊王文學。當時諸王官屬多被夷滅、由是彌不自安、因謝病免。久之、授大理司直、卒於官、時年五十二。有集十卷行於世」。

⑥ 「隋書序劉臻、崔儦、王頍、諸葛頴、王貞、孫萬壽、虞綽、王冑、庾自直、潘徽爲文學傳、今檢崔儦、王頍、孫萬壽各從其家傳、其餘編之此篇」。

⑦ 前掲注⑤參照。

⑧ 「時之文人、見稱當世、則范陽盧思道、安平李德林、河東薛道衡、趙郡李元操、鉅鹿魏澹、會稽虞世基、河東柳晉、高陽許善心等、或鷹揚河朔、或獨步漢南、俱騁龍光、並驅雲路、各有本傳、論而敘之」。

⑨ 「早發揚州還望鄉邑詩」については、前掲注②書に「孫萬壽《早發揚州還望鄉邑詩》志疑」があり、別人の作という考證がなされている。

⑩ 「遠戍江南……詩」はテキストによって字句の異同がかなり多い。ここでは『隋書』標點本に據り、必要に應じて本文の中で異同を示してゆく。

⑪ 斷章の例として、『隋書』標點本では四十句、三十二句、十二句の三段に分かち、周建江輯校『南北朝隋詩文紀事』（二〇〇一年、中州古籍出版社）ではそれを踏襲して各段を「其一」「其二」「其三」と呼び、三章から成る連作詩として扱っている。また鄔國平『漢魏六朝詩選』（二〇〇五年、上海古籍出版社）では、最初の四十句をさらに二つに分けて四段落構成としている。

⑫ 前掲注②書「孫萬壽與唐人詩」參照。

⑬ 標點本『三國志』卷六一「陸胤傳」に引く華覈の表では「厲」を「暴」に作る。

⑭ 前掲注⑪鄔國平書七〇六頁を參照。

⑮ 前掲注⑪鄔國平書七〇七頁を參照。

⑯ 前掲注②書に「孫萬壽、王冑與〝周記室〟」という考察が示されていて、參考になる。

⑰ この詩は、『文苑英華』卷二四〇「酬和一」だけでなく、卷三〇九「悲悼九・遺跡」にも收錄されている。

⑱ 『三國志』魏書明帝紀、青龍三年「是時、大治洛陽宮、起昭陽、太極殿、築總章觀」の條の注に引く『魏略』。

⑲ 「齊亡、陽休之等十八人同入關、稍遷司勳下大夫」。

「江南は瘴癘の地」そして故鄉は（原田）

⑳「行恭少頗驕恣、文遙令與范陽盧思道交遊。文遙嘗謂思道云、小兒比日微有所知、是大弟之力、然白擲劇飲、甚得師風。思道答云、郎辭情俊邁、自是克荷堂構、而白擲劇飲、亦天性所得」。

㉑ 前掲注②書「元行恭姓名及事迹」參照。

㉒ 安藤信廣「晩年の江總――「秋日遊昆明池」詩を手がかりに――」（一九七六年、『漢文學會會報』三五號）

＊小論は二〇〇六年三月、青山學院大學で開催された六朝學術學會例會において行なった口頭發表の一部をもとに、修正を加えたものである。司會の勞をとって下さった安藤信廣先生をはじめ、多くの先生方より有益なご助言を頂くことができた。この場を借りてお禮を申し上げたい。